

第8章 図書館および図書・電子媒体等

I 全学

【目的】

教育・研究に必要な学術資料を収集・体系化・保存し、これを本学の教職員、学生に提供することを目的とする。この目的を十全に果たすため、各々の学問分野にわたり必要とされる学術資料を過不足なく収集し、それらについて十分な検索手段を確保し、さらに、学術情報をよりスムーズに提供するための人的資源の確保、養成に努める。また、図書館が備えるべき、かつ後世に残し伝えるべき基本的学術資料の収集にも配慮を図る。

1 目的・教育目標

(目的等)

【現状】

本学図書館は、人文社会科学系専門図書館としてかつ本部的機能を持つ中央図書館、人文社会科学系教養図書館として位置づけられた和泉図書館、自然科学系図書館として位置づけられた生田図書館の3館から構成される。各館はそれぞれの位置づけに基づき自立的に学習用資料の選書及び利用者サービスを行なっている。また、研究用図書についてはそれぞれの分野の専門研究者である教員が選書を行っている。

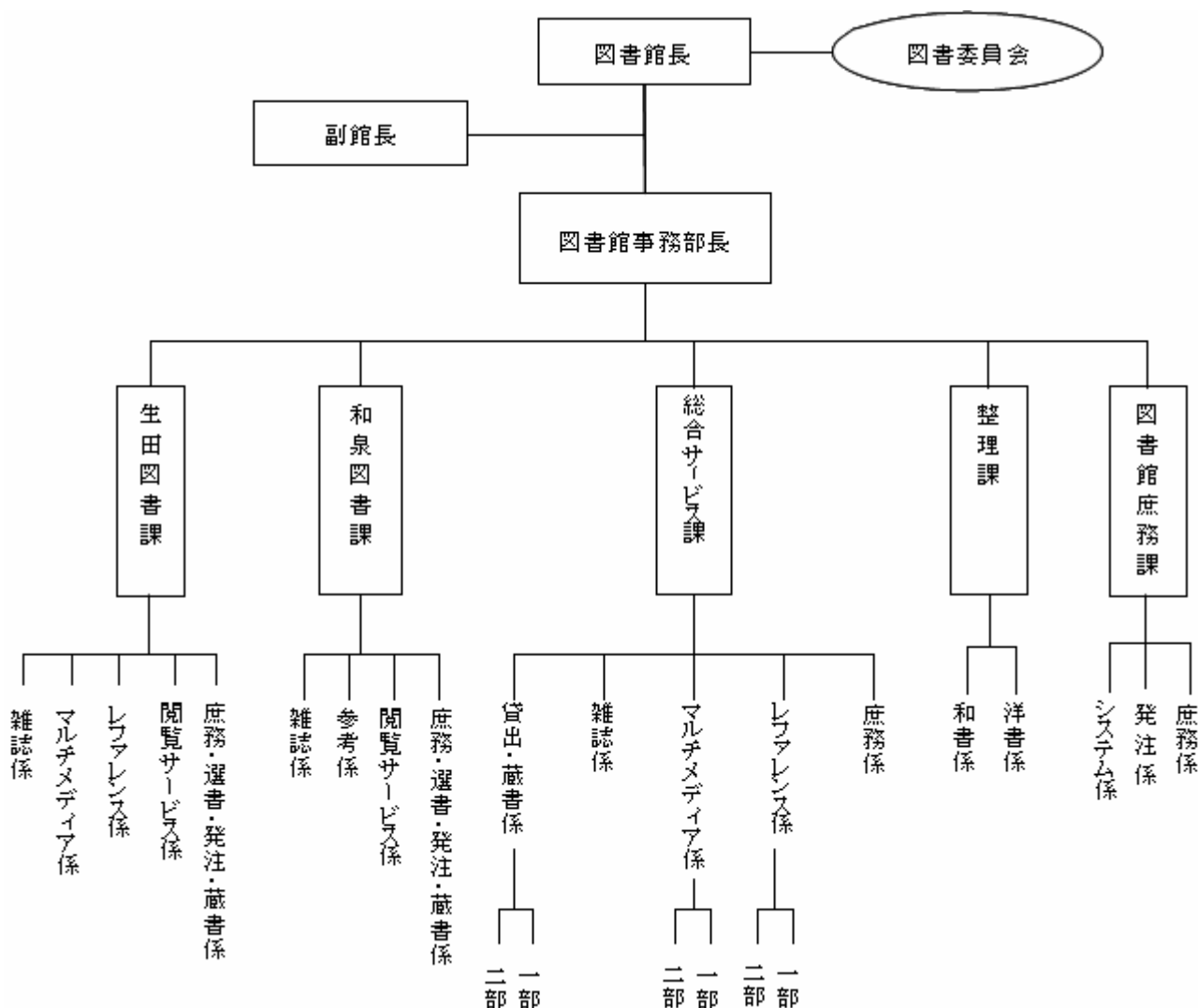
図書館運営の大綱は、学長から委嘱を受けた各学部教員により構成される図書委員会が図書館長からの諮問を受け、諸々の事項を決定している。

近年の情報・ネットワーク技術により、従来の紙媒体資料に加え、電子的形態の資料が急激に増加しつつある。したがってこれら資料の収集、コンピュータ、ネットワークといった情報提供環境の整備・充実が急務である。特にこうした機能を著しく欠き、新しい図書館の使命を果たすべく苦慮している和泉図書館、並びに改善が求められている生田図書館の情報ネットワーク環境についても、高速回線の敷設、アクセスポイント（モバイルコンセントや無線LAN）の増設、ネットワーク接続可能機器の増設（PC等）については今後の大きな課題である。

さらに、施設の充実だけではなく、図書館サービスを担う図書館職員の育成強化も課題となっている。従来から図書館職員に求められる資質に加え、資料形態の変化、図書館サービス概念の変化に対応しうる人材を育成するために、図書館としての養成体制を整備する必要がある。

特に図書館にとって最も重要な利用者サービスであるレファレンスを担う図書館員については、大学院や海外など様々な研修を通じてその専門性を高めるとともに、専門職として確立することが望まれる。

図書館組織図



【改善方針】

情報提供環境の充実のために、特に新和泉図書館の建設に向けて図書館内に検討WGを設置し具体案の策定作業を進めた。さらにこの案を基に、和泉委員会との連携を図り同委員会と合同で新和泉図書館建設連絡協議会を設置し、計画の具体化を検討し、全学的な理解を得るために「新和泉図書館建設に関する要望」を学長に提出した。その骨子は下記のとおりである。

(1) 基本コンセプト

和泉キャンパスの新しいシンボル：

多様な知的コミュニケーションのあり方に対応できる「知の拠点」

- ア 学習図書館機能（教育・学習支援サービス）の充実
- イ 研究図書館機能（研究支援サービス）の充実
- ウ IT環境の充実，デジタル資料の充実
- エ 図書館リテラシー教育の充実
- オ 雑誌エリアの拡充
- カ 国際交流センターとの連携（留学生支援サービス）
- キ 高大連携による高校生への図書館開放
- ク 図書館の社会貢献，地域社会との連携
- ケ 学内関係部署との連携

(2) 規模

延べ総面積 8,545 m²は、閲覧席，開架図書，雑誌，マルチメディアの各エリア増加等により，現在の図書館（4,864 m²）の約 1.76 倍になる。

- ア 閲覧席エリア 1,200 席
- イ 開架図書・雑誌エリア 800,000 冊（現在の蔵書約 315,000 冊，年間約 10,000 冊増加）
- ウ 特別文庫室（10,000 冊収蔵） 同閲覧室
- エ マルチメディアエリア 50 席
- オ 図書館リテラシー演習室 30 人規模
- カ その他の閲覧エリア 目録検索コーナー，新刊雑誌・新聞展示棚，マイクロ資料室，点字閲覧室・対面朗読室，教員閲覧室，コピー室，ギャラリー，ラウンジ等
- キ 業務スペース 事務室，貸出カウンター，レファレンスカウンター，雑誌カウンター等
- ク 共有スペース 玄関ホール，廊下，階段，トイレ，機械室等

なお，生田図書館については，新和泉図書館建設に次ぐ課題という位置づけとなっている。

図書館職員養成の課題については，2005 年度から研修制度を設け，「外国人利用者への図書館利用支援」「布施辰治，山崎今朝弥旧蔵資料調査」「明治大学図書館所蔵版木の整理と版本の調査」「木版挿絵入西洋初期印刷本零葉コレクション解題目録作成」「蘆田文庫所蔵書籍解題目録作成」，合計 5 つの研修プロジェクトを立ち上げた。今後，さらに組織的な研修，育成体制の確立を検討していく。

（図書館および図書・電子媒体等）

- ・ 図書，学術雑誌，視聴覚資料，その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性
- ・ 図書館施設の規模，機器・備品の整備状況とその適切性，有効性
- ・ 学生閲覧室の座席数，開館時間，図書館ネットワークの整備等，図書館利用者に対する利用上の配慮の状況とその有効性，適切性
- ・ 図書館の地域への開放の状況

【現状】

図書館では，資料購入予算約 7 億円を「学術専門図書費」「学習用図書費」「逐次刊行物費」「電子的資料費」に大枠で分け，教員・図書館員による「収書委員会」「新聞・雑誌委員会」「特別資料選定委員会」「教員による学習用図書選書委員会」等，委員会形式の恒常的な選書体制を整え，体系的な資料の収集に努めている。2005 年 3 月 31 日現在の蔵書数は，中央図書館約 105 万冊，和泉図書館 32 万冊，生田図書館 35 万冊，生田保存書庫 35 万冊となっている。

電子的資料については，国内外の 22 のデータベース，12 の電子ジャーナルデータベースと契約し，多種多様な情報提供を実現している。なお視聴覚資料については，視聴覚センターが別途資料の収集・提供を行っている。

大きな課題として，近年の外国雑誌年平均約 8 % の値上りにより，資料購入予算に占める逐次刊行物費の比重の増加がある。この結果，学術専門図書，学習用図書の収集に影響が生じている。また，電子的資料の拡大への対応については次に掲げる点も大きな課題である。

- ① O P A C との連携
- ② 冊子しか使えない利用者への教育
- ③ 電子ジャーナルにして資料が使えなくなる利用者への対応
- ④ 電子ジャーナルへのアクセスへの維持・管理
- ⑤ バックナンバーへの要望への対応
- ⑥ I L L と電子ジャーナル（電子ジャーナルにすると I L L 対応できないものが発生する）
- ⑦ 予算的対策

図書館施設の規模を第 8 章 表 1 に示した。2001 年 3 月に新図書館施設として中央図書館が開館したことにより駿河台校舎における図書館利用環境の抜本的改善が実現した。和泉図書館においては，情報ネットワーク関連設備を現行施設に追加することが困難であり，この点は今後抜本的に改善を図る必要がある。また，蔵書の増加に伴い書庫の収容能力が限界に達しつつある現状であり，生田保存書庫の有効活用をすすめているが，今後 8 年程度で図書館全体の書庫は満杯になる見込みである。

第8章 表1 施設

2005.3.31 現在

			中央図書館	和泉図書館	生田図書館	生田保存書庫	全館
総延面積 (㎡)			12,485	4,864	4,940	1,346	23,635
用途別面積	サービス スペース	閲覧 (㎡)	4,888	2,492	1,955	0	9,335
		マルチ (㎡)	545	0	28	0	573
		情報端末 (㎡)	—(注1)	22	40	0	62
		その他 (㎡)	760	681	402	0	1,843
	管理ス ペース	書庫 (㎡)	3,506	1,382	1,536	1,104	7,528
		事務 (㎡)	1,382	91	207	0	1,680
その他 (㎡)		1,404	196	772	242	2,614	
書架収容力	延板延長 (m)		35,662	10,571	17,100	19,920	83,253
	収容可能冊数 (冊) (注2)		990,600	293,639	475,000	554,000	2,313,239
(注1) 中央図書館は、端末スペースを閲覧に含む							
(注2) 収容可能冊数の算出：棚板延長90cmで25冊の計算（日本図書館協会）							

図書館利用者用座席数、開館時間を第8章 表2・3に示した。中央図書館、和泉図書館、生田図書館ともに22時までの開館時間を確保し、さらに、中央、生田図書館においては休日開館を実現し、授業時間の前後はもとより、休日も含め図書館を利用した学修の便を図っている。全学部生に対する席数の割合は、中央図書館が10.2%、和泉図書館が9.9%、生田図書館が11.8%で、ほぼ10%前後の数値となっているが、なお学生数に対して十分な数を確保するに至っていない。情報ネットワークについては、中央図書館では約100台のコンピュータ、650口の情報コンセントを設置するなど、利用環境は充実したものとなっている。和泉図書館、生田図書館ではコンピュータ、情報コンセントとも十分な数を備えるに至っていない。なお、3館とも書庫の利用者への開放を実現し、図書館の蔵書の殆どについてブラウジングによる利用が可能になっている。

第8章 表2 座席数

2005.3.31 現在

		中央図書館	和泉図書館	生田図書館	全館
総閲覧座席数 (席)		1,274	1,054	749	3,077
座席数	閲覧室	653	849	512	2,014
	参考コーナー	137	42	69	248
	雑誌コーナー	170	24	80	274
	マルチメディア	99	17	11	127
	対面朗読室	—	4	—	4
	パソコンルーム	—	58	—	58
	グループ閲覧室	56	34	73	163
	点字閲覧室	5	4	—	9
	校友閲覧席	8	0	—	8
	地図室	20	—	—	20
	マイクロ閲覧室	6	—	1	7
	教員用	6	22	3	31
	多目的ホール	114	—	—	114

		中央図書館	和泉図書館	生田図書館	全館		
開館状況	年間開館総数日数	(日)	333	272	328		
	土曜日開館日数	(日)	41	41	41		
	休日開館日数	(日)	62	8	64		
	土曜開館総時間数	(時間)	430.5	374.5	430.5		
	休日開館総時間数	(時間)	434.0	56.0	448.0		
	休暇期間中(学年暦)の 開館日数(日)	夏季		41	30	43	
		冬季		1	0	0	
春季			49	47	44		
館外貸出冊 数	館外貸出総冊数	(冊)	191,978	73,798	57,463	323,239	
	教職員	(冊)	7,987	5,730	1,914	15,631	
	学生	(冊)	161,500	66,277	53,344	281,121	
	学外者	(冊)	22,491	1,791	2,205	26,487	
入館者数(人数)			940,015	559,382	418,962	1,918,359	

その他の利用者サービスとして特筆すべきものは下記のとおりである。

(1) レファレンスサービスの充実

レファレンスは図書館にとって最も重要な利用者サービスであり、文献、電子資料に精通した職員を重点的に配置している。従来のカウンターサービスに加えてウェブによるオンラインレファレンスやFAQなども検討している。

(2) 利用者の苦情へのこまめな対応

3館に投書箱を設置して、利用者の意見を聴取し、原則として2週間に一度、掲示により回答している。利用者からの指摘によって改善した事柄も多い。回答は2006年度から図書館ホームページで公開することになっている。なお、Web上からの投書受付についても検討している。また、2004年度に3館で、図書館サービスを充実するための基礎資料作りとして利用実態調査を実施し、その結果を2005年度に図書館ホームページで公開した。

(3) ニーズに応じた閲覧施設

一般の閲覧室、パソコンなどの利用を禁止したブース型の静寂な閲覧室、ゼミや小授業が可能なグループ閲覧室、機の配置などを自由に変えておしゃべりもできる共同閲覧室など、大型の地図を広げたり壁掛けのできる地図室、新書・文庫コーナーに隣接した椅子だけの軽読書席など、利用目的に応じた閲覧施設を設置し、利便性を図っている。

(4) ノートパソコンの貸出

図書館の情報機能を高めるため、中央図書館で30台、和泉図書館で20台、生田図書館で20台の貸し出し用ノートパソコンを用意して館内利用に供している。各館とも利用が多く、この増設が課題である。

(5) シラバス本コーナーの設置

教育支援の一つとして、シラバス掲載の参考図書を全て2冊ずつ購入し、1冊は開架書架、1冊はシラバス本コーナーに学部・教員別に配架している。現在それらの所蔵情報をOh-o! Meijiシステムと連携することを検討している。

(6) マルチメディアコーナー

3館にインターネットに接続できるパソコンを設置している。「日経テレコム」や「Dialog」などの主要な外部データベースを無料で提供していることから、常時満席の状態である。

(7) ギャラリーにおける蔵書等の展示

図書館の特色ある蔵書や新収の貴重書を展示するとともに、解題小冊子を作成して、蔵書の理解を深めることに役立っている。例年7月から9月にかけては、司書課程及び司書講習と連携した「図書館の文化史」展も開催している。

(8) 校友やリバティ・アカデミー会員への開放

生涯学習時代への対応として、OBやリバティ・アカデミー会員などの社会人に対し館外貸出しを含めたサービスを行っている。特に休日の利用は、これらの利用者が全入館者数の半数近くになっている。

(9) 附属中高生への開放

中高で進められている「調べ学習」を支援するために、貸出しを含めたサービスを実施している。なお、今後は、系列校である中野学園にも拡大する予定である。

(10) 英語版ホームページ

留学生や海外からの利用に対応するため、2006年10月から公開する予定である。

また、図書館利用者教育の一環として、副館長をコーディネータとし、図書館職員も講義の一部を担当する学部間共通総合講座「図書館活用法」を2000年度から開講し、多数の受講者を集め、入館者数や資料の館外貸出数の増加など、大きな成果をあげている。さらにゼミナール毎の課題に直結した図書館の活用法を担当教員との打合せに基づき説明する「ゼミツアー」の実施、各種データベースの利用講習会の開催など、多彩な教育活動を図書館利用者に対して行っている。

○図書館活用法講義実績

(駿河台／前期／月曜3限)

- 4/11 「大学図書館への招待」 木谷光宏 (政治経済学部教授)
- 4/18 「図書館の情報サービス機能」 浮塚利夫 (総合サービス課長)
- 4/25 「図書目録検索システム 1」 丸山郁太郎 (図書館庶務課)
- 5/ 9 「図書目録検索システム 2」 畑野繭子 (図書館庶務課)
- 5/16 「レファレンスツールの利用法」 平田さくら (総合サービス課)
- 5/23 「新聞・雑誌記事の探し方」 梅田順一 (総合サービス課)
- 5/30 「インターネット情報とその利用法(1)」 菊池亮一 (図書館庶務課)
- 6/ 6 「インターネット情報とその利用法(2)」 久保木和義 (総合サービス課)
- 6/13 「インターネット情報とその利用法(3)」 中林雅士 (図書館庶務課)
- 6/20 「データベースの利用」 井田正道 (政治経済学部助教授)
- 6/27 「レポートと論文の作成法」 木谷光宏 (政治経済学部教授)
- 7/ 4 「図書館とわたしー欧米の図書館の写本室, 稀覯本室を訪れてー」 森洋子 (理工学部教授)
- 7/11 「本講座のまとめ」 大野友和 (図書館庶務課長)

(和泉／前期／金曜3限)

- 4/15 「本講座の意義と目的」 大野友和 (図書館庶務課長)
- 4/22 「図書館とわたし」 佐々木憲一 (文学部助教授)
- 5/ 6 「図書館で何ができるかー図書館資料の概要と種類ー」 中村正也 (和泉図書課)
- 5/13 「図書の探し方(1)」 柴尾晋 (和泉図書課)
- 5/20 「図書の探し方(2)」 金澤敦子 (和泉図書課)
- 5/27 「レファレンスサービスとはなにか」 金澤敦子 (和泉図書課)
- 6/ 3 「文献と情報の探索(1)」 梅林千香子 (和泉図書課)
- 6/10 「文献と情報の探索(2)」 柴尾晋 (和泉図書課)
- 6/17 「データベース, 電子図書館の利用法」 梅田順一 (総合サービス課)
- 6/24 「インターネット情報とその利用法」 久保木和義 (総合サービス課)
- 7/ 1 「レポートと論文の作成法」 森久 (経営学部教授)
- 7/ 8 「資料・情報の整理法」 中村正也 (和泉図書課)
- 7/15 「本講座のまとめ」 木谷光宏 (政治経済学部教授)

(和泉／後期／金曜3限)

- 9/30 「本講座の意義と目的」 大野友和 (図書館庶務課長)
- 10/7 「図書館とわたし」 佐々木憲一 (文学部助教授)
- 10/14 「図書館で何ができるかー図書館資料の概要と種類ー」 中村正也 (和泉図書課)
- 10/21 「図書の探し方(1)」 柴尾晋 (和泉図書課)
- 10/28 「図書の探し方(2)」 金澤敦子 (和泉図書課)
- 11/ 4 「レファレンスサービスとはなにか」 梅林千香子 (和泉図書課)
- 11/11 「文献と情報の探索(1)」 梅林千香子 (和泉図書課)
- 11/18 「文献と情報の探索(2)」 柴尾晋 (和泉図書課)
- 11/25 「データベース, 電子図書館の利用法」 梅田順一 (総合サービス課)
- 12/ 2 「資料・情報の整理法」 中村正也 (和泉図書課)
- 12/ 9 「インターネット情報とその利用法」 菊池亮一 (図書館庶務課)
- 12/16 「レポートと論文の作成法」 森久 (経営学部教授)
- 1/ 13 「本講座のまとめ」 木谷光宏 (政治経済学部教授)

(生田／後期／金曜3限)

- 9/ 30「本講座の意義と目的」 木谷光宏（政治経済学部教授）
- 10/ 7「図書館とわたしー欧米の図書館の写本室，稀覯本室を訪れてー」 森洋子（理工学部教授）
- 10/14「図書目録検索システム(1)」 坂口雅樹（生田図書館課）、関口則枝（整理課）
- 10/21「図書目録検索システム(2)」 坂口雅樹（生田図書館課）、関口則枝（整理課）
- 10/28「図書館とわたしー私は図書館をこのように利用したー」 村田良美（理工学部専任講師）
- 11/ 4「新聞・雑誌記事の探し方(1)」 伊藤光郎（総合サービス課）折戸晶子（生田図書館課）
- 11/11「新聞・雑誌記事の探し方(2)」 伊藤光郎（総合サービス課）折戸晶子（生田図書館課）
- 11/25「インターネット情報とその利用法(1)」 菊池亮一、中林雅士（図書館庶務課）
- 12/ 2「インターネット情報とその利用法(2)」 菊池亮一、中林雅士（図書館庶務課）
- 12/ 9「データベースの利用法」 井田正道（政治経済学部助教授）
- 12/16「様々な文献の取り扱い方」 坂口雅樹（生田図書館課）
- 1/ 13「レポート・論文の書き方まとめ方」 尾崎宏（農学部助教授）
- 1/ 20「本講座のまとめ」 木谷光宏（政治経済学部教授）

履修者数

	駿河台(前期)	和泉(前期)	和泉(後期)	生田(後期)	計
2000年度	115	210			325
2001年度	150	176			326
2002年度	236	201			437
2003年度	*130	223		198	551
2004年度	177	575		292	1044
2005年度	87	*228	*229	*155	699

ゼミツアー参加者数

	回数	参加者数
中央図書館	96	1,068
和泉図書館	114	2,084
生田図書館	6	140
計	216	3,292

図書館の地域への開放については、すでに2003年3月、「千代田区立図書館と明治大学図書館との相互協力に関する覚書」を締結し、千代田区民に対する本学中央図書館の開放を実現している。この協定により、千代田区住民は図書館利用手続き（年間3,000円）を経て、資料の貸出も含め、中央図書館の利用が可能になっている。また、2004年7月には「杉並区立図書館及び杉並区内大学・短期大学図書館の相互協力に関する協定書」を締結し、いわゆる「杉並区図書館ネットワーク」に参加することにより、杉並区民に対する和泉図書館の開放を実現している。この協定により、杉並区民は図書館利用手続き（年間1,000円）を経て、資料の貸出も含め、和泉図書館の利用が可能になっている。さらに、中央図書館における「アフリカ文庫講演会」やギャラリーでの展示会、和泉図書館における講演会「著者と語る」など地域への開放を念頭に置いた諸活動を実施している。

また、図書館が長年にわたって蓄積してきた人的資源、知的資源を様々な形で、積極的に開放、活用し、社会に還元していくことを図書館の大きな使命ととらえ、下記のことごとに取り組んでいる。

(1) 司書課程との連携

司書課程には、図書館職員2名が兼任講師として出講している。また、2005年度から開始された夏期集中の司書講習には5名が出講し、それぞれ業務で蓄積した経験を生かして指導に当たっている。また、図書館ギャラリーにおいて授業に関連した図書の展示を定期的に開催している他、グループ閲覧室の実習授業への提供、情報検索授業への外部データベース（教育用バージョン）の提供なども行っている。

(2) 図書館職員の研究成果の公表

2005年度における図書館職員の業績は下記のとおりである。

●熊野正也

- ・「人物記念館の理想像に触れるー世界的な作家・グreek邸からー」『北欧・ロシアの博物館と美術館を訪れる旅-フィヨルドと古都サンクト・ペテルブルグの11日間』VOL.6 望年会発行(2005.6)

- ・「駿風ーコラム」 明治大学広報第 560 号(2005. 8)
- 飯澤文夫
 - ・「明治大学の開放ー継承と発展」 常民大学研究紀要 6 後藤民俗思想史の継承と新たな展開 (pp. 27~35)
 - ・「図書館所蔵蘆田文庫古地図コレクションは世界の至宝」 明治 29 号(pp. 78~79)
 - ・「大学史の散歩道」 明大生の応援歌 歌い継がれる学生歌ー校歌・応援歌・愛唱歌 明治大学学園だより第 340 号(p. 6 2006 年 3 月)
- 久松薫子
 - ・「図書館自主研修グループ報告大学図書館のアウトリーチサービスー外国人利用者サービスの向上に向けてー」 図書館の譜：明治大学図書館紀要第 10 号(pp. 159~169 2006 年 3 月)
- 中林雅士
 - ・「図書館システムの高可用性とシステム構築ー負荷分散とデータベースの多重化ー」 図書館の譜：明治大学図書館紀要第 10 号(pp. 183~200 2006 年 3 月)
- 仲山加奈子
 - ・「私立大学図書館協会国際協力委員会 2005 年度海外集合研修概要報告」 図書館の譜：明治大学図書館紀要第 10 号(pp. 124~141 2006 年 3 月)
- 浮塚利夫
 - ・「戦時下の明治大学図書館」 図書館の譜：明治大学図書館紀要第 10 号(pp. 170~182 2006 年 3 月)
- 伊藤光郎
 - ・「最近の海外 I L L 事情ー中央図書館レファレンス係の依頼の取組みを中心にー」 図書館の譜：明治大学図書館紀要第 10 号(pp. 142~158 2006 年 3 月)
- 久保木和義
 - ・「問題解決と創造のための手がかかりー公共図書館，大学図書館，そして明治大学図書館ー」 Meiji Now 第 18 号
- 飯塚貴子
 - ・「蔵書の玉手箱 明治大学図書館所蔵資料の蔵書印(2)」 図書館の譜：明治大学図書館紀要第 10 号(pp. 71~74 2006 年 3 月)
- 松丸憲一
 - ・「本棚の隅『愛読書』 ノーラン・ライアンのピッチャーズ・バイブル」 図書館の譜：明治大学図書館紀要第 10 号(p. 209 2006 年 3 月)
- 中村正也
 - ・「大学図書館の役割」 和泉図書館の現在 明治 28 号(pp. 84~87 2005 年 10 月)
- 梅林千香子
 - ・「蔵書の玉手箱 明治大学図書館所蔵資料の蔵書印(2)」 図書館の譜：明治大学図書館紀要第 10 号(p. 71~74 2006 年 3 月)
- 坂口雅樹
 - ・「書物は光を浴びて」 芽ぶく：啓明学園親の会機関誌 第 46 号(pp. 58~59 2006 年 2 月)
 - ・「大学図書館の役割」 図書館アンケートにみる生田図書館利用者像 明治 27 号(pp. 84~87 2005 年 7 月)
 - ・「コツコツからワクワクへ 松山二大学図書館の鼓動」 図書館の譜：明治大学図書館紀要第 10 号(pp. 201~208 2006 年 3 月)

(3) 図書館紀要「図書館の譜」

1997 年 3 月の創刊で、2005 年度に第 10 号まで刊行した。図書館の持つ書誌学的世界から思想や学問の根源を問い直す作業を通じて、新たな「知」の創造に資する（後藤総一郎当時元館長の創刊の辞）とい高邁な理想のもとに創刊したものである。毎号、図書館の知的資産である蔵書を中心としたテーマにより、教員と図書館職員が約半数ずつ、合計 20 本近い論考を掲載し、その役割を果たしている。

【改善方針】

資料購入予算に占める逐次刊行物費の比重の増加に対しては、逐次刊行物の厳密な評価による取捨選択、私立大学図書館コンソーシアムによる電子ジャーナル、データベース契約の推進を行った。また 2004 年度に続き、アンケート調査に基づく購読中止を含めた購入雑誌の見直しを行った。今後さら

に他大学との協力による分担収集等、価格高騰への対処方法を探らなければならない。さらにこれまで収集対象としなかった分野の資料について、特に新設された文学研究科臨床人間学専攻への対応として、特別予算枠を設け心理学関連資料の収集に努めた。増加する蔵書への対処として、研究棟地下1階旧研究所事務室書庫を新たに図書館書庫として確保することができたが、さらに蔵書構成の適正化を図り、資料の収集、保存方針を見直す。

図書館利用者用座席数の不足については、図書館の面積に限りがあるため大幅な増加は現在のところ困難である。このため、図書館外から図書館資料をある程度利用可能にする電子図書館システムの充実を図り、図書館利用者に対する改善の一助としてきた。図書館は3館平均で年間340日開館しており、これは私立大学図書館としては有数の日数であるが、さらに学部長会等の要望を受け、冬季休業中の開館日拡大を実現した。

図書館活用法の履修者数は年々漸増しており、特に2004年度には大幅に増加した。このことにより、例えば実習科目で一人一台のパソコンを使つての授業ができないなど授業環境が悪化した。教育効果が得られないとの判断から、2005年度には、定員制を設け履修者数を抑制した。しかし、授業の目的が学生の図書館への導入教育であることからすれば、少しでも多くの履修者を受け入れることが大切であるため、2006年度には少人数教育を維持しつつ、授業コマ数を増やして対応することになっている。また、カリキュラムについても実習授業を重視して図書館リテラシーの効果を高めるよう工夫する。授業のレジュメや資料は図書館ホームページで公開しているが、教育の情報化推進本部と連携してデジタルコンテンツ化し、履修者の予習復習に役立てるとともに、広く公開する。

ゼミツアーの内容は、施設案内、利用方法、利用上のマナーに加え、オプションとして、特定主題資料の配架案内、OPACや外部データベースの検索方法を用意している。今後は、オプション部分を重視し、ゼミ教員との連絡をさらに密にし、ゼミや学生・院生の主題テーマに沿って、さらに専門的な解説（例えば、法律関係データベース、統計関係データベース、電子ジャーナル、などの使用法）を中心にし、教育・研究支援に直接的に結びつくものに改善したい。なお、生田図書館は、中央図書館、和泉図書館に比較して参加者が少ないが、これは理工学部や農学部の場合、図書館の基本的な活用法については研究室単位で先輩が後輩を指導する習慣が定着しているためと思われる。2006年度は、ゼミツアーと別に、理工学部教員の求めにより授業に図書館員が外向して説明を行う機会があった。今後、教員との連携を一層密にして生田地区の特性に沿った、より実効性のあるものに変えていく。また、卒論作成のためのアドバイスメニューも検討している。

地域への開放についてもさらに進めるため、川崎市多摩区民への生田図書館の開放に関する覚書を2006年3月に川崎市多摩区と交わし、2006年4月から実施のはこびとなった。

（学術情報へのアクセス）

・学術情報の処理・提供システムの整備状況、国内外の他大学との協力の状況

【現状】

図書館業務については発注から目録データ作成、予算管理まですべてのシステム化が終了し、殆ど全ての蔵書についてのデータ化も終了している。このため図書館利用者は、インターネットを通じてどこからでも蔵書データベースの検索が可能になっている。また国立情報学研究所の学術情報システムに参加することによって他大学とのシステムの連携も大きく進展している。また「図書館ポータルシステム」を構築し、これにより利用者はインターネットを通じて資料の貸出予約、取寄せ依頼、自身の利用状況の把握などが可能になっている。なお、2005年度「図書館ポータルシステム」の校友への開放も実現した。さらに2005年度には、学生・教職員・校友に対して携帯サイトの利用を開始した。提供するサービスは、図書館からのお知らせ、開館スケジュール、本日の開館状況、月間スケジュール、蔵書検索（OPAC）、ポータルサービス（貸出延長、予約状態確認、配送状態確認）、図書館への問い合わせである。

他大学との協力については、本学、法政大学、明治学院大学、学習院大学、東洋大学、青山学院大学、國學院大学、立教大学の8大学で「山手線沿線私立大学図書館コンソーシアム」を形成し、相互の教職員学生が各大学の図書館を利用できる体制を構築した。本学図書館はコンソーシアム8大学のうち最も他大学から利用される図書館となっている。さらに2004年度からは、杉並区図書館ネットワークを形成することにより、本学和泉図書館、女子美術大学、高千穂大学、東京立正短期大学、立教女学院短期大学との相互利用を、また国立情報学研究所情報資料センターとの大学院生レベルの相互利用を実現している。

大学別コンソーシアム利用状況

	青山	学習院	國學院	東洋	法政	明治	明治学院	立教	受入人数計
青山	—	153	950	217	469	670	232	262	2,953
学習院	193	—	46	124	67	176	53	249	908
國學院	328	47	—	36	61	83	58	13	626
東洋	—	—	—	—	—	—	—	—	—
法政	311	52	146	245	—	895	74	142	1,865
明治	1,495	639	1,147	1,786	2,363	—	238	722	8,390
明治学院	216	113	110	255	246	195	—	196	1,331
立教	264	290	257	105	302	95	230	—	1,543
送出人数計	2,807	1,294	2,656	2,768	3,508	2,114	885	1,584	17,616

【改善方針】

図書館システムの改善事項としては、電子図書館システムの充実・整備を進めている。図書館が所蔵する一次資料の電子化・学外各種データベース・電子ジャーナル等を一元的に、情報ネットワークを通じて利用者に提供する電子システムの構築を進めつつあり、図書館ポータルシステムの改善、携帯電話版OPACの公開などにより、利用者サービスの改善を行っていく。

また、海外協力の一環として、2005年12月カナダ・ケベック州政府と協定を結び、相互の永続的な資金供出により明治大学、さらには日本国内におけるカナダ・ケベック研究に資することを目的として「ケベック文庫」を設立した。他大学図書館との協力については、利用者サービス面だけではなく、資料の分担収集等も含め、協力体制を拡大するために、特に山手線沿線私立大学図書館コンソーシアムのメンバー校との間で検討を進めている。

（社会への貢献）

【現状】

地域への図書館開放の一環として、千代田区民に対する中央図書館の開放、杉並区民に対する和泉図書館の開放、川崎市多摩区民に対する生田図書館の開放を、資料の貸出も含め実現している。また、大学関係者はもとより、市民をも対象として、中央図書館ギャラリーにおける各種展示、アフリカ各国の政府関係者や研究者を招いて行う「アフリカ文庫講演会」、和泉図書館における「講演会『著者と語る』」などを毎年実施している。

地域住民貸出状況

中央図書館（千代田区民）	188冊
和泉図書館（杉並区民）	632冊
合計	820冊

2005年度に実施した講演会は、下記のとおりである。

○著者と語る（第5回）

「金八先生と国際交流活動」 小山内美江子氏（シナリオライター）

2005年6月24日 和泉図書館第2開架閲覧室

○アフリカ文庫講演会（第7回）

「アフリカ：グローバル化する世界への挑戦」

ラミアリソン・ヘリンザトゥブ・エメ氏（マダガスカル共和国アンタナナリボ国立大学教授）

2005年6月9日 中央図書館多目的ホール

○アフリカ文庫講演会（第8回）

「南アフリカの市民とNGO活動」 津山直子氏（日本国際ボランティアセンター南アフリカ事務所代表） 2005年11月11日 中央図書館多目的ホール

また、海外協力の一環として、2005年度にカナダ・ケベック州政府と協定を結び、相互の永続的な資金拠出に基づく「ケベック文庫」を図書館に設置した。この文庫は本学はもとより日本国内におけるカナダ・ケベック研究に多大な貢献をなすものと期待される。

【改善方針】

ケベック文庫については、政治経済学部のカナダプロジェクトとの連携を深めるとともに、資料の充実（そのための予算確保）、目録や資料の公開利用、公開講座の開催などを通じた社会貢献でも活用を行っていく。

（事務組織と教学組織との関係）

【現状】

図書館の事務組織は、3つの図書館の利用者サービスを担う総合サービス課、和泉図書課、生田図書課、目録データベースの構築を担う整理課、図書館全般の企画・管理業務を担う図書館庶務課の5課からなる。図書館運営の大綱は、学長から委嘱を受けた各学部教員（図書委員）により構成される図書委員会が図書館長からの諮問を受け、決定される。また、図書委員会のもとに収書構成、利用者サービス等図書館活動に関わる各種課題を検討する小委員会を設け、それぞれの問題に関する検討を行っている。

図書委員会は年4回から6回程度開催され、図書館運営の検討を行うとともに、図書委員を通じて教学組織との連携協力体制を確立している。

【長所】

図書館長、副館長、図書委員会各種委員会委員長と図書館スタッフ（事務管理職、副参事職）で、年間2回のスタッフ研修会を開催し、図書館の抱える課題の討議を行い、問題点を共有している。

（事務職員の研修機会）

【現状】

職員の質の向上を図るため、恒常的に各種の専門的な研修に派遣している。2005年度実績は次のとおりである。

①文化庁	著作権実務講習会	2名
②国立情報学研究所	目録システム講習会、等	5名
③私立大学図書館協会	大学図書館職員長期研修、等	9名
④専門機関による講習会	Linuxs システム講習、文化財虫菌保存対策研修会、法律図書館基礎講座、等	34名

上記の外部研修に加え、職員の自発的な研修意欲を高めるために、2005年度から次の内容による図書館自主研修制度を設け予算措置をとった。

主旨

図書館職員は、書誌学、目録、自館蔵書構成の把握、利用者サービス技術、レファレンス技術、情報処理など多岐にわたる専門知識が必要とされる。これら専門知識を養うための個人・グループが行なう自主研修に対し図書館が支援を行うことで、自己研鑽の活動を促進し、図書館職員の質的向上を図る一助とする。

支援の対象

- 1) 図書館職員を主として構成し明確な研修課題と目標を持つ自主研修グループ、または個人。
- 2) 研修課題は図書館業務に関連するもので、その成果が図書館の改善に資するものであること。

支援の内容

- 1) 資金的支援。
- 2) その分野を専門とする教員の紹介、参加依頼。
- 3) 所属長の裁量による業務時間内の活動。

2005年度には、5グループ計20名の応募があり、採択した。

【改善方針】

自主研修制度の成果についてはまだ検証されていない。この目的を果たすために、予算を確保して今後の継続を図るとともに、発表会の開催、図書館紀要への報告掲載などの機会を設け、研修の成果を応募者のみならず、図書館共有のものとしていくことにしている。

（自己点検・評価）

【現状】

図書館副館長を委員長とし、図書委員2名、事務管理職2名、事務職員2名からなる「図書館自己点検評価委員会」を設置し、恒常的に自己評価を行なう体制を整えている。毎年学長に提出する「教

育・研究年度計画書」の内容に関する実施・実現状況の検証を行い，年度末に「自己点検・評価報告書」を作成している。

【長所】

毎年「図書館年次報告書」を編集・刊行し，前年度の諸活動を総括するとともに，図書館活動の自己点検・評価，企画立案のためにこれを活用している。

II 学部

法学部

【目的・目標】

図書・電子媒体等の資料を体系的・計画的に整備し、利用者の有効な活用に供する。

（図書、図書館の整備）

- ・ 図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性
- ・ 図書館施設の規模、機器・備品の整備状況とその適切性、有効性
- ・ 学生閲覧室の座席数、開館時間、図書館ネットワークの整備等、図書館利用者に対する利用上の配慮の状況とその有効性、適切性
- ・ 図書館の地域への開放の状況

【現状】

本学においては、実務関連書を含め学習に役立つ図書・資料(法律関連ソフト等電子媒体を含む)等を広く網羅し、学習に資することを目的として、法律学に特化した専門図書館としてローライブラリーが設置されている(法学部教員は利用可)。ローライブラリーでは法律学はもちろんのこと、情報法学・情報技術の操作に精通した専門職員の指導のもとに、予習・復習に必要な図書・文献・資料の所在を探り、外部データベースにアクセスして必要な情報を入手することができる状況になっている。

【長所】

図書館利用者に対する利用上の配慮の状況とその有効性、適切性については、一般閲覧室のほかグループで討議しながら利用できる共同閲覧室が設けられるなど、利用者の利用目的に応じて差別化を図るなどの工夫も見られる。

【問題点】

継続図書(外国の判例集など)の購入費が増大しているため、研究上必要な書籍の購入費(研究用図書費)を圧迫しており、事実上新たな外国の学術論文等の所蔵ができないという事態も生じている。図書館には主に外国の重要な学術雑誌で所蔵されていないものもある。中央図書館の利用者が保存書庫の文献を閲覧・借り出しをする場合、申し込んで少なくとも1日待たなければならないという事態が生じている。

日祝日については、開架されていない図書の貸出業務は行われていない。

図書館においては、コピー機が十分に設置されていない(特に開架部分について)。そのため、時間帯によっては、コピーを行うために相当時間待たなければならないこともある。

ローライブラリーについては、スペース・座席数・収蔵資料ともに十分なものとなっていない。

【改善方針】

継続図書の中には比較的安価な電子媒体で代替可能なものもあるので、それによって購入費を捻出する。図書館未収蔵の外国学術雑誌については、ローライブラリーに所蔵されているものもあるので、それを活用する。電子媒体の資料を導入することにより、蔵書スペースを確保する。図書館利用者に対する利用上の配慮については、休日に書庫へ入庫できるようにし、また同じく休日に貸出業務を行うようにする。

文学部

【目的・目標】

教育・研究に必要な図書・学術雑誌・視聴覚資料等を適切に整備し、合わせて学術情報の収集・提供を通じて、国内外の大学との連携・協力関係を構築することが目的である。これを具体的に実現するために、図書館の設備や蔵書の充実、使い勝手のよい図書館作り、社会に開かれた図書館の活用を目標としている。

(図書、図書館の整備)

- ・ **図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性**
【現状】

図書館が購入する図書の他に、各専攻が積極的に特別枠の図書予算を利用して資料の収集に努めているので、教育研究上必要な資料が系統的・体系的に集まっている。本年度は本学部出身者である作家倉橋由美子の追悼展が企画されている。そのための資料の収集がなされつつあり、この作家の詳細なクロニクルがつけられる。

【長所】

学術フロンティア推進事業では、源氏物語関係の写本の収集を引き続いておこなった。また琉球の冊封関係の歴史史料を中国より取り寄せて充実を図っている。さらに地図は経年的に体系立った収集が行われ、蘆田文庫は日本を代表する地図コレクションである。

【問題点】

財政難を理由に図書購入費が大幅に削減されているのはきわめて大きな問題である。特に、雑誌等の予算が減少し、研究に支障をきたしている。

【問題点に対する改善方針】

図書資料充実の重要性及び、情報時代における図書館資産の拡充の絶対的必要性を訴えていく方針である。

経営学部

【目的・目標】

学部独自の図書室／閲覧室を有していない経営学部図書委員会としては、大学図書館の全体的な枠組みの中での位置付けに鑑みて、次のような目的・目標を設定する。本学部図書委員会は、学部教育・研究体制を支援するために必要な図書・学術雑誌・資料等の収集・整備を図るとともに、新たな学習・教育機会の創造並びに研究体制の整備等を通じて「知のアーカイブ」たる大学図書館のサービス・質の向上を促し、もって図書利用者の満足を最大化することを目的とする。

(図書、図書館の整備)

- ・ **図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性**
【現状】

大学としての蔵書は約 205 万冊である。学部としては研究用図書費、研究用基礎資料費等による資料整備を行っている。大学全体の大幅な予算削減に伴い、学部図書予算も大幅に削減され、緊縮予算の下、より効果的な学部図書費の執行が求められた。

2005 年度予算

研究用図書費： 5,100,000 円（前年比－18%）

研究用基礎資料費： 2,880,000 円（前年比－18%）

研究用図書と学習用図書を区別し、利用目的別の資料整備を図るとともに、学習用図書の選書については、経営／会計／公共経営の各学科から選書委員を選出して対応した。また、和泉図書館分については、分野ごとに各教員が対応した。

予算削減に伴う洋雑誌購入の見直しのための全学アンケートに協力し、洋雑誌購入費削減に努めた。その結果として、2006 年 1 月から全学で 58 タイトルの洋雑誌の購入を見直し、停止した。

【長所】

学部図書委員の精力的な活動により、大幅な予算削減への対処として、学部図書費の執行状況・予算残高を学部教授会においてこまめに報告するとともに、図書申請が特定の教員に偏らぬように執行時期を調整した。

【問題点】

毎年、図書予算が削減されている。そのため、教員サイドから図書館に備えるべきとの要請のあった新規洋雑誌について、実現できなかった。オンラインジャーナルのさらなる拡大が必要である。

【問題点に対する改善方針】

学部図書予算のさらなる縮小が予想されるため、選書機能を高め、効率・効果的な資料整備が行われるよう工夫を凝らす。予算削減の中、現行のサービスを維持・向上させるために、利用者の側のニーズがどの点に存在し、また、どのような改善を望んでいいのかを明確にする。オンラインジャーナルの拡大を年度計画書に織り込み、改善を図る。

情報コミュニケーション学部

【目的・目標】

学部独自の図書室／閲覧室を有していない本学部としては、大学図書館（中央/和泉）の全体的な枠組みの中での目的・目標を設定している。教育・研究に必要な図書・学術雑誌・視聴覚資料等を、教員・学生双方にとり、利用しやすい図書館とすることを目的とする。そのために、駿河台と言う地の利を活かして、山手線内の大学との連携、和泉と言う地縁を活かして、杉並区内の8大学と提携して、学生・教員のみではなく広く市民にも大学図書館を開放している。そして、特に、学生の学習及び教員の教育に資するために、本学内図書委員会と連携・連絡し、選書委員による蔵書に、より一層の充実を図り、教員の研究に貢献できるような図書館とすることを目標としている。

（図書、図書館の整備）

- ・ 図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性
- ・ 図書館施設の規模、機器・備品の整備状況とその適切性、有効性
- ・ 学生閲覧室の座席数、開館時間、図書館ネットワークの整備等、図書館利用者に対する利用上の配慮の状況とその有効性、適切性
- ・ 図書館の地域への開放の状況

【現状】

新1年生に、必修ゼミの時間に、必ず図書館のツアーを行っている。

2004年7月26日に「杉並区図書館及び杉並区大学・短期大学の相互協力に関する協定書」が締結され「杉並区図書館ネットワーク杉並区内大学・短期大学図書館」がスタートした。同年8月2日より、杉並区民に本学和泉図書館が開放された。そして、同年、11月1日より本学及び、立教女学院短期大学、女子美術大学、高千穂大学、東京立正女子短期大学の杉並区5大学間で図書館が開放された。

【長所】

学生全員が、1年生から、図書館の利用法を身に付けることができる。

上記の杉並区5大学の利用状況を見ると、平成16年度（事業開始16年8月～平成17年3月）と平成17年度（平成17年3月～平成18年2月）では、和泉図書館の利用者（登録者及び館内閲覧者）と貸し出し冊数が1番多くなっている。

【問題点】

学生の「活字離れ」を食い止めることは難しい。和泉図書館の場合、利用者である登録者数が、平成16年度は49人だったが平成17年度は42人、館内閲覧者数は平成16年度が108人、平成17年度が70人と少なくなっている。ただし、貸し出し冊数は平成16年度が393冊、平成17年度が579冊と増加している。しかし、まだスタートして2年なので、今後の推移を見守りたい。

【問題点に対する改善方針】

3年生になると、本学の中央図書館を主に利用することになるので、新3年生になったときに、中央図書館ツアーに参加してもらい、自分の関心領域を中心に、より図書館を利用してもらうように教員も努める。図書館開放は、本学が独自で広報等を行うと言うよりも、杉並区の広報等に協力して、より進めていきたい。

